

ただの自転車屋

北村 想

登場人物

藤村大造 (フジムラ・タイゾウ) その島の自転車屋 (柄本明)

伊丹久作 (イタミ・キユウサク) 映画監督 (綾田俊樹)

能登 覧 (ノト・ラン) シナリオライター (ベンガル)

鷄乃 新 (トリノ・シン) 映画俳優 (山地健二)

人口およそ五百人ほどの、鹿児島県の離島の町。  
季節は夏。その年も猛暑。

島に何軒かある民宿（主には釣り人宿）。本間と次間のある二階の一室。裏手は山。窓からは海もみえる。ミザンサーヌについてはそれだけ。アトは舞台美術さんにお任せ。

ここに、酔狂にも（というか、多少の手違いがあったようだが）映画監督の伊丹久作と、脚本家の能登寛が、俳優の鶏乃新と共に、いわゆる「仕事籠もり（もしくは缶詰）」で、次回作のシナリオを書くために滞在することになった。その初日。

ちようどいま、エアコンが故障しているので、修理屋が呼ばれたところ。

この修理屋（藤村大造）、本業は自転車屋なのだが、小さな離島の町ゆえ、こういうものの修理もやるらしい。

とはいえ、電気関係の修理に慣れているワケではなさそうで、脚立の上に立ち、天井近くの壁に取り付けられた旧式のエアコンを腕組みしながら睨んでいる。

お昼過ぎ。運悪く、台風が接近中。

能登は座机に肘をついて大造をみつめていたが、

能登 「どうなの。

大造 「そう、ですなえ。

能登 「睨んでたって直らんでしょう。

大造 「そう、なんですすがねえ。

伊丹は椅子とテーブルのある外に面した次間の窓から海を覗いていたが、本間のほうにもどってきた。

伊丹 「（能登に）直りそうなの。

能登 「睨んでるだけ。

伊丹「睨んでらっしゃるねえ。

大造「取説があれば、なんとかなるんですが。

伊丹「ナニ、取説って。

能登「取り扱い説明書のことですよ。

大造「このタイプ、かなり古いんですよ。十、四五年は前のだなあ。

能登「古いってのは、素人が観てもワカルよ。

大造「そうですねえ。

能登「あのさ、いま、ここに着いて、あんまり暑いでそれ点けてみたら、それなんだ。

伊丹「動かないのよ。

能登「どうなってんのかね。

大造「故障でしょうねえ。

能登「だから、それくらはワカルって。

大造「そうですねえ。

能登「あのね、ともかく暑いだよ。かなり暑いよ。ワカルでしょ。

伊丹「そうそう、これじゃあ仕事にならないんだ。

大造「ワカリマス。暑くて仕事にならない。ワカリマス。私も仕事にならない。

伊丹「あんた、それは困るよ。

大造「私、まったくの専門というワケでもナイんです。

能登「えっ、どういうこと。

大造「私、本業は自転車屋です。

伊丹・能登「自転車屋っ。

能登「何で、自転車屋がクーラーの修理に来るワケ。そんなひと呼んだの、こここの、

大造「クーラーではなくて、これはエアコンです。

伊丹「そうだよね。そうなんだ。

能登「伊丹さん、何に感心してんのよ。

伊丹「いや、確かにそうだなと思って。

大造「あの、ですね。ここは人口が500人くらいですし、あいにく電機屋（電気屋ともいう）というのがナイんです。大きい作業は本島のほうから来ますが、これくらいのもの販売や修理などは、私のほうが請け負ってるんです。販売といってもカタログ渡すだけですけど。いまはたいていネットで買えますから。

能登「クーラーの修理は出来るの。

大造「私、一応、高校は電気科出て電気技師二級、持ってます。大きな電気工事は出来ませんが、家電のような簡単なものなら充分です。自転車のほうは免許というのはナイんで、誰でも自転車屋は開業出来ますが、資格というのがあります。技能試験があつて自転車を時間内にばらして組み立てるんです。この自転車は持ち込みなんです。学科試験もありますけど、そんなに難しいもんじゃありません。私は日本交通管理技術協会の警察庁認定技能検定と、日本車両検査協会の通産省認定技術審査合格です。資格はどっちも持ってますから、自転車なら絶大なる信用があります。それから、これはクーラーではなくてエアコンです。

伊丹「そうだね。何かスゴソウで、さほどはどうかなくて感じだね。

能登「そうだね、どうかなじゃないよ、伊丹さん。だから、こんなところはやめようって、いったんだよ。

伊丹「いや、俺もね、こんなところだとは思わなかったからね。

能登「どんなところだと思つたのよ。

伊丹「会社のほうには、こう、なんというかな、静かな海のみえる島で、都会の喧騒を離れて、ゆったりと温泉につかりながら、ホンが書けるところと、そういうふう注文というか、要望というか、お願いというか。

能登「まあ、たしかに、海はみえるし、静かだしね。温泉らしきものもあるみたいだけども、クーラーがこれじゃなあ。

大造「エアコンです。

能登「だから、そのエアコン、あんたでも直りそうなの。

大造「うーん、まあ、これなら何とか出来そうなの、

伊丹「直るんだ。

大造「出来そうなの、まあ、何とか、

能登「頼まないなあ。

伊丹「とにかくその（何とか）ってのを頼むよ。暑くて死にそうなんだから。死ぬよもう。何なら死んでみせようか。

鶏乃、そこらの何かにもたれて、足を投げ出していたが。足といえば靴下をこのひと履いてナイ。

鶏乃「薄笑いする」

伊丹「おい、鶏乃っ、

鶏乃「(特に反応はナイ)

伊丹「お前、いま笑ったろ。(と、鶏乃にアタル。暑いからかな)

鶏乃「笑いましたか。

伊丹「笑ったよ。

鶏乃「そうですか。

伊丹「何が可笑しいんだ。

鶏乃「いや、とくに何も。

伊丹「何も可笑しくナイのに笑う人間なんていないぞ。

鶏乃「そうですね。

伊丹「そうですねって、何を笑ったんだ。

鶏乃「いや、ちょっと思い出し笑いかな。

伊丹「思い出しわ、(らいつて何だ、といおうとしたのだが)

大造「(突然) あっ、ワカッタ。

伊丹・能登「えっっ、

大造「リモコンありませんか。

伊丹「リモコン。

大造「こいつのなんですけど、その辺に転がってませんか。

能登「クーラーのリモコンか。クーラー、リモコンと、(探す)

鶏乃「(みつけた) これじゃないですか。

大造「ああ、それ。クーラーじゃなくてエアコンの、ですけど。ちょっと拝借。こういうのねえ、最近はこういうところではリモコン操作に切り替わってんです。本体いじられると、故障しますから。故障を防ぐっていうのかな。

能登「立派に故障してるじゃん。

大造「ええ、ですから、そのリモコンの乾電池が切れてるってのが多いんですよ。

伊丹「そうなの。

大造「なくなって、はじめてワカルありがたさ、親と小銭と乾電池っていうでしょ。

伊丹「いうの。

能登「聞かないなあ。

大造「乾電池つてのは粗末にしちゃいけません。乾電池は粗末にしてはイケナイ。乾電池はあ、粗末にい（リモコンの乾電池を入れ換えている）。

伊丹「うん、まあ、いいたいことはワカル。

大造「さあ、これでどうだ。（と、リモコンを操作するが）

エアコンは、ウンともスンとも。

大造「これで、リモコンの乾電池が原因ではナイということは判明しました。

能登「そんなこと判明して、どうなるのよ。

大造「ちよっと取説が残ってナイか、訊ねてきます。（去る）

伊丹・能登、残されて、まあ、テレビでも点ける。鶏乃は相変わらず。

テレビが台風情報をやってる。

能登「あらあら、ヤバイね。

伊丹「あらあ、雲行きが妙だと思ったら、台風来てんの。

能登「ここ、NHKしか入んないな。

伊丹「台風、どうだって。

能登「今日、明日ってことじゃナイみたいだけど、雨にはなりそうだな。

伊丹「逸れろ、逸れろ。ウーンンンン。

能登「ナニ、唸ってるの。

伊丹「いや、一応、念力なんだけど。

能登「念力で台風が逸れるワケ。

伊丹「逸れないよね。

能登「部屋、替えてもらうワケにはいかないのかな。

伊丹「そうだね。（と、内線電話を取る）・・・なんか、つながんないな。

能登「思い切って、宿、替えようよ。

伊丹「そうだね。

自転車屋、もどつて来た。

大造 「ありました、ありました。

能登 「えっ、取説あつたっ、

伊丹 「さすが、こういう離島のひとは物持ちがいいねえ。

大造 「これがあれば、百人力です。(脚立に昇る)

伊丹 「これで、やっとな涼しくなるか。

能登 「ほんとにひでえ暑さだな。

伊丹 「気象変動だよ。地球も終りだなあ。最後の人類だ。最後の人類が死ぬような宿屋じゃないよ、ここは。

能登 「なにを大袈裟なこといつてんの。(大造に) で、どう、取説でいけそう。

大造 「取説は百人力なんです、どうもアト五百人力くらい必要な、と。

伊丹 「何よ。どうということ。

能登 「取説、役にたたないってことなの。

大造 「いや、これはこれで。とはいえ、かなり古い型ですから。もし、本体が破損してたら、交換部品があるかどうか。(と、取説を口にくわえて、エアコンのカバーを外しにかかると、それから、なにやらもごもごいつてる)

能登 「えっ、何だつて。

大造 「(とりあえず、取説を口から手にもどすと) そこんとこ、押し入れに扇風機ならあるらしいですよ。

伊丹 「扇風機あるんだ。

能登 「押し入れね。まあ、このさい、扇風機でも助かる。

伊丹 「鶏乃くん、ちよつと、ほら、

鶏乃 「はい。

鶏乃、扇風機を取り出してきて、スイッチを入れる。

伊丹 「おっ、いい風。

能登 「どこが。

伊丹 「ちよつとぬるい風に削除、訂正。

能登「ほんとにナイよりマシ以上の何モノでもないな。

伊丹「(ナンダか歌う) η俺は銀座の扇風機。

能登「何よそれ、

伊丹「小林旭の『銀座旋風児』。あったでしょ。

能登「古いなあ、そんな映画、誰も憶えてないよ。

伊丹「しかし、『銀座旋風児』なんてタイトルは、ちょっと今じゃ考えつかないよ。あれ、シリーズで六本も撮ってたんだよ。

能登「せりふにもあったな。悪人が、小林旭が登場すると、一あつ、旋風児だー。なんていうんだもんね。あのひとは、銀座の煙草屋の小母さんなんかからも、ちよいと旋風児さん、なんて呼ばれていたのかな。

大造はとりあえず、黙々とエアコンに立ち向かっている。

能登「しかし、暑いなあ。ほんとに。

伊丹「40度こえてんじゃないの。

能登「そりゃ、ナイだろうけど。

伊丹「熱中症になるね。

能登「どうもハナシがウマすぎるって気はしてたんだ。

伊丹「何のこと。

能登「ここだよ、ここ。会社がよくこんな贅沢させてくれたなって。

伊丹「私の映画が続けてヒットしたから、まあ、功劳褒賞だよ。

鷄乃「監督、退職されるんですか。

伊丹「何で、おれが辞めるんだよ。

鷄乃「功劳褒章って、退職金のことでしょ。

伊丹「ええっ、そうなの。

能登「そう。

伊丹「じゃあ、ナンダヨ。

能登「報奨とか、功劳賞とかでイイんじゃないの。

伊丹「じゃあ、それにしとくよ。

能登「しかし、伊丹久作の低予算映画が二本も立て続けにヒットするのはねえ。



伊丹「どっちも予算が八千万で、興収三億五千万に五億三千万だったからなあ。会社もウハウハだよ。脱税で捕まるんじゃないのかな（笑う）、冗談。

能登「伊丹さん、あんたさあ、あの映画、助監督の江藤ってのに絵コンテまで描かせてたでしょう。」

伊丹「ん、まあ、やらせたけど。」

能登「ホンだって、あんたのを江藤がかなり筆入れたって聞いたよ。」

伊丹「書き直したいっていうから、ね。」

能登「伊丹さん、座って観てただけじゃないの。ほんとに監督したのっ。江藤が撮ったようなもんじゃないのおっ。暑いなあ。」

伊丹「まあ、いいじゃない。江藤くん、あの二本で、助監から監督昇進したんだから。いまのラバさんと結婚でもするんじゃないかな。あーっ、でも、暑いよ。」

能登「江藤さん、どうしてんの。」

伊丹「そういや、あれも何処か旅行するっていったな。」

鶏乃「江藤さんなら、インド行ってますよ。」

伊丹「インドっ。」

能登「そりやまた、妙なところいったな。」

鶏乃「オレも誘われたんですけどね。」

伊丹「インドって、あれかい、自分捜しの旅とか。」

能登「そういうの、流行ったね。」

伊丹「何でインドに自分を捜しに行くんだろうね。インドって、お土産に「自分」とか売ってんのかな。で、江藤もその口かい。」

鶏乃「いまどき、そんなことヤルものいませんよ。江藤さん、インド映画の撮影所を見学するんだって言ってましたよ。」

伊丹「ほおっお。勉強熱心だねえ。」

能登「年間映画制作本数、映画館の数、観客総数ともに世界一っていうからなあ。ほんとかどうか、かなりほんとみたいだけど。」

鶏乃「インド映画は、国民の最大の娯楽ですから。」

能登「戦前戦後の日本にも、そういうイイ時代があったな。出入り口まで立ち見の客でいっぱいだよ。」

伊丹「いまはパチンコかい。」

能登「いやあ、パチンコもけっこうキツイらしいよ。

伊丹「鶏乃くんは、どうして断ったの。誘ってもらったんだろ。会社の銭だろ、どうせ。

鶏乃「私は（オレ）になったり（私）になったりするが、ここは（私）で、久しぶりに里帰りするのもいいかなと思って。

能登「里帰り。里帰りってっ、

伊丹「そうかあ、ここ、会社に勧めたのおまえさんか。ここ、きみの故郷なのか。

鶏乃「中学生までですけど。

伊丹「どおりで、まあ酷い、いや、静かで温泉があって、海がみえて。良い所を紹介してくれてありがたいねえ。会社がさあ、書き上がるまで滞在していいからなんて、ホイホイと三人分もカンヅメ代出してくれたのが、やっとワカタよ。書き上がる頃には、ミイラになっちゃってるよ。助監督がインドで、こっちはこんな僻地か。

能登「江藤は監督昇進でしょ。

伊丹「まあ、そうだけど。映画のヒットと監督昇進記念ですか。インドねえ。インドか。

能登「助監督の経験の長いひとはいいねえ。やっぱり師匠と弟子あってこそその映画だからなあ。最近の助監督やらずにいきなり監督で撮っちゃうのもいるでしょ。

伊丹「いるいる。

能登「ありや、たいていが駄目だね。

伊丹「駄目。ダメダメダメ。

能登「勉強してナイ、苦勞してナイ、貧乏してナイのナイナイづくし。

伊丹「ナイナイナイ。

能登「伊丹さんは助監督やったの。

伊丹「やりましたよ、苦節十年だよ。知らなかったの。

能登「知ってますよ。皮肉いっただけ。

伊丹「えっ、何の皮肉。

能登「鈍いなあ、もう。

伊丹「えっ、

能登「いいよもう。ああ、しかし暑いなあ。サウナだなあ。インドより暑いんじゃないの。まったく。（大造に）ここってさあ、夏はいつもこうなの。

大造「台風のせいじゃないですか。

伊丹「そうそう、そうだよ。台風ってのは湿ってるから、蒸すんだよ。

能登「俺はエアコンが動かないせいだと思うよ。」

伊丹「そりゃ、そうだよ。」

能登「どう、だいぶかかりそう。」

大造「バラして点検してますから。」

能登「なんか、かかりそうだなあ。」

大造「部品の故障なら、なんとか間に合わせでいけるかも知れませんが、冷媒がカラッケツだと、どうにもなりませんね。」

能登「冷媒ねえ。」

伊丹「こういう離島とかにはさ、御告げ婆アとか、拝み屋なんかがついて、霊媒もついでにやっつてんじゃないの。」

能登「伊丹さん、あんたの冗談、ちつともオモシロクナイ。」

伊丹「暑いから、ギャグも冴えないんだなあ。」

能登「気温に関係なく、冴えないよ、あんたのは。」

大造「いま、地球温暖化でフロンが駄目になりましたから、冷媒もいろいろ変わりましたですね。」

伊丹「真面目な話、エアコンてのは、その冷媒で空気を冷やしてんでしょ。」

大造「エアコンの仕組みというのはですね、空気熱のエネルギーの応用ですよ。空気熱をくみあげて冷却や加熱を行うヒートポンプ技術ですよ。この熱をくみあげるときに欠かせないのが冷媒というモノでしてね、つまり、エアコンの中では、室内機と室外機の間を冷媒と呼ばれるガスがぐるぐる回ってんです。このガスが、冷房時には部屋の熱を外に、暖房時には外の熱を部屋に移動させるんです。これはね、気化熱の利用なんです。たとえば、アルコールを綿に含ませて皮膚をふくと、ヒヤツとするでしょ。医者で注射されるときなんか、そうでしょ。あれはアルコールが蒸発するときカラダの熱をうばっているからなんです。液体が気体になるときは、周囲から熱をうばい、反対に、気体が液体になるときは、周囲に熱を放出するんです。エアコンの室内機と室外機をつなぐパイプの中をそういう冷媒がぐるぐる回ってんです。」

伊丹「スゴイツ、こりゃあ、エアコン直るよ。直せそうだよ。」

大造「ヒートポンプ技術という空気の熱エネルギー利用というのは、

能登「あのさ、能書きや御託や知識で、直せるもんじゃナイでしょ。口ばっかり使ってナイで、もっとさっさと手を動かして早いとこ、なんとかしてよクーラーっ。」

伊丹「クーラーじゃなくて、エアコンでしょ。失礼だよ、能登ちゃん。いまのレクチャー聞いて、このひとは、ただの自転車屋じゃナイと、俺はみたよ。

能登「まあ、それは、めでたく、クー、いやエアコンが動いたらね。そんなら認めるよ。

大造「それから、この島には、御告げ婆さんも、拝み屋もいません。この民宿の裏手の山に行くと、斜面にはたくさん墓がたってますが、みな十字架です。

伊丹「十字架。十字架って、

大造「ええ、あの十字架です。

能登「つまり、この島の住民は、クリスチャンが多いってことか。

大造「と、いいですか、いくなればクリシタンです。

伊丹「クリシタン。

能登「バテレンだな。

伊丹「バテレン。能登ちゃん、バテレンってのはどういう漢字を当てるんだ。

能登「(靴からノートパソコンを出して座机に置くと、立ち上げる)これじゃないかなあ。

【伴天連】という字を伊丹にみせる。というか伊丹、覗き込む

伊丹「何語。

能登「ラテン語かな。

大造「バテレンはポルトガル語のパードレ (padre) に由来するクリシタン用語ですよ。意味は司祭とか神父ですね。まあ、概ね聖職者のことをいいますね。布教組織の指導的立場にあつて、階級的にはイルマンの上位に位置します。

伊丹「イルマンてのは、ナニ。

大造「兄弟という意味のクリシタン用語で、イエズス会の修道者のうち、司祭職にある者をパードレといい、イルマンはパードレを補佐する者です。昔はイルマンをやつて後(のち)パードレに昇級したんです。漢字で書くと伊太利の伊に歌留多の留に満ると書いて、伊留満でしたか。

伊丹「うわわっ、学あるねえ。冷媒のことだけじゃナイんだ。

大造「この島の者ですから。

能登「この島の者っていい方は、何か含みがあるな。この島、どうしたの。

伊丹「おっ、さすが能登ちゃん。物書きは着眼点がチガウね。チャクガンテンなんて、俺もカツコイイこと口にしちゃったけど。暑いね。

大造「ですからね、この島の住民のご先祖さんは、殆ど隠れクリシタンなんですよ。島原

の乱のアト、ここまで島原から逃げて来たんです。

伊丹「隠れキリシタン。へーえ、オモシロイ話だねえ。暑いけど。じゃあ、自転車屋のダシナ、あんたもご先祖はアーメンなの。

大造「いや、私は流入ですから。

伊丹「そうだよねえ、そういうひともあるよね。

能登「それで十字架か。なるほどねえ。しかし、島原の乱のキリシタンは、全滅、皆殺しだったはずだけど。

大造「いやあ、それがね、島原の乱の直前に逃げたのもいるんです。ですから威張れた話じゃナインです。それに、いったん棄教、まあ、キリシタンやめますって嘘ついて、難を逃れたんですから。

伊丹「まあ、それはそれで、生き延びる方法だったんでしょ。暑い。

能登「みんな揃って踏み絵とかしたんだな。

伊丹「ココロの中ではさ、マリアさまの絵を踏みながら、これは嘘ンコですから、とか謝ってたんだろ。暑いなあって思いながら。

能登「いろいろ拷問されたんだろ。蓑踊りとか、指切り歩きとか。

伊丹「何だよ、それ。

能登「蓑を着せられて、それに火をつけられるのよ。アトね、両足の指だけチョン切られて歩かされたりとかね。

伊丹「うわあ、熱そう。痛そう。そりやあ、嘘でも、キリシタンやめる気になるなあ。オレなんか、ここに二日居ろっていらしたら、踏み絵でもなんでも踏んじゃうね。

大造「ところがですね、そういうヒドイのをやられたのは、まあ、殉教者ってことで天国行けますから、死んじやっても文句はいえないんでしょうけど、その国の小さな大名には、頭のイイ家来がいますね。殿様はおまけに残酷なことがキライだときいていたから、その家来の諫言で、捕まえた信者たちを獄（ひとや）に入れて、単純にまったく飯を食わさなかったんです。

伊丹「飯抜き。

能登「食事を与えなかったのか。一種の兵糧攻めだな。

大造「ええ、人間てのは、何が辛かって、踏み絵や蓑踊りより、腹が減るということがイチバン辛いみたいですね。三日ほど何も食わせなかったら、いたって簡単に揃ってキリシタンやめるっていいでしたんでしょ、信者たちが。

伊丹・能登「へーえっ、

大造」で、連中は所払いになって、この島までやって来て、その子孫がいまの住民です。まったく情けないキリシタンの子孫なんです。けれども、この出身者は、何処へ嫁ぐなり、転居するなりしても、死んだらここに帰って来るんです。で、この墓に入るんです。情けないなりに義理はおしてんですよ。

伊丹「鶏乃くん、あんたもそうなの。

鶏乃「何がですか。

伊丹「だから、隠れキリシタンなのかって、ご先祖。

鶏乃「さあ、どうだったかなあ。そういう話はあまりしなかったみたいですね。

能登「隠れ、だもんな。

鶏乃「仏壇あったような記憶、ありますけど。

能登「仏像の顔がキリストだったり、マリアだったりすんのよ。

鶏乃「いやあ、お釈迦様だったと思いますけど。

能登「新ちゃん、お釈迦様の顔知ってるの。(微笑)

鶏乃「いやあ、知りませんよ。けど、あんなもんじゃないスカ。

能登「あんなもん、ねえ。

鶏乃「だって、家にある仏壇の仏様の顔なんてどれも一緒でしょ。

能登「ソニーに買収された『コロンビア映画』のオーピングロゴ、自由の女神に似てるけど、あれね、(コロンビアガール)っていうんだ。

鶏乃「トーチを持ってるあの女性ですか。

能登「そうそう、あれ。

鶏乃「あの女神さんが、どうしたんです。

能登「あの女神の顔ね、時代によって何回も変わってるのよ。

鶏乃「えっ、そうなんですか。

能登「そう。どれも一緒じゃないのよ。

鶏乃「そうなんだ。

能登「顔じゃナイけど、東映さんのロゴで、岩礁に波がザッパーンてあるでしょ。

鶏乃「はい、有名なアレですね。三角印で、東映って出てくる。

能登「あれだって、何度も新しく撮り直してんだよ。

鶏乃「いやああ、そうでしたか。

伊丹「何か考えごとをしていたようだが」よしっ、これだ。決まりっ。

能登「ナニっ、いきなりどうしたの。」

伊丹「次、これでいこうよ。」

能登「これでって。何を。」

伊丹「決まってんじやナイ。次のホンだよ。伝説の隠れキリシタンの子孫の島。裏山の頂上から麓まで、ずっと立ち並ぶ十字架。しかし、先祖は飯抜きで踏み絵を踏んだ腑抜けたち。悲壮感漂う情けなさ。どうすりゃいいんだ義理と人情のキリスト教。どうっ。」

能登「それって、どういうシークエンスなのよ。」

伊丹「書けそうだから。」

能登「書けそうだからというよりスケソウダラだな、まったく。」

伊丹「何よ、それ。」

能登「だって、暑いんだから。」

鶏乃「いいですよね、監督とか、シナリオさんとか、ソフトの方は。暑いっていい訳出来るんだから。オレたち役者は暑かろうが寒かろうが、文句いったら、降ろされますよ。」

伊丹「そりゃあ、ワキだからしょうがナイよ。主役じゃナイんだから。」

能登「でも、ワキはワキで利点というか、長生きは出来るから。主役は人気落ち目になったらオシマイ。バラエティとか、商業演劇で食えりゃいいほうだな。ギャラだって、あつという間に半額以下なんだから。」

鶏乃「そりゃまあ、そうですが。最近ワキの競争もキビシイですから。」

大造「お客さんたちは、映画関係のひとなんですか。」

伊丹「そうそう。俺、名監督の伊丹久作。このひと、ふつうの脚本家。」

能登「いい紹介してくれるね。」

伊丹「それで、その男は俳優。そんなふうにはみえないけどね。」

能登「新ちゃんは大学で柔道やってたんでしょ。」

鶏乃「まあ、そうですけど。いまの日本には、もう柔道なんてありませんよ。」

能登「どういうこと。」

伊丹「えっ、じゃあ、オリンピックでやってるあの競技、ナンなの。」

鶏乃「あれは片仮名のジュードーです。」

伊丹「どうチガウの。」

鶏乃「柔道には先手はナインです。相手の攻撃に対して、身を守るために反撃するのが柔

道の基本ですから。しかし、じゃあ、試合で何もしないで相手の攻撃を待っているようになるか。ご存知のように〈指導〉つてのをとられます。反則になります。攻撃を仕掛けないと反則負けになるなんてのは、柔道じゃありませんよ。

能登「いわれてみると、うーん、たしかに、

伊丹「そうだね。

能登「だから、衿の取り合いしてんのか。

鶏乃「とにかく衿を取らないとどうにもなりませんから、ですから、手の指なんか骨折ばつかですよ。

伊丹「骨折すんの。

鶏乃「しますね。

伊丹「痛そう。

鶏乃「あの〈空気投げ〉で有名な三船久蔵十段は、身長159センチ、体重55キロでした。ですからオリンピック柔道が体重別とか重量クラスで闘うことになったことについて「そんなものは柔道ではナイ」、ハッキリいつてらっしゃいますね。だいたい〈空気投げ〉は、小さな者が大きな者を投げる技ですから。

伊丹「観た観た、ユーチューブ。残ってんの映像が。空気投げ。(やってみせるが) こんなのをさ、これくらいのがさ、こう、こうかな、こんなふうには、こうだな、小さなのが大きいのをひよいひよいだから。ありやあ人間技じゃナイね。

鶏乃「全然そうじゃナイです。空気投げつてのは、逆衿とるんです。実際には観たことはナイんですが、手をこうクロスして、衿を掴みながらくると回るように相手の懐に入つて、腰を落してひよいです。

伊丹「ひよいは、一緒だな。

鶏乃「ですから、相手が大きいほど有利なんです。あんなのが出来る柔道家はいまはいませんよ。いまは片仮名のジュードーばかりですから。三船十段は人間です。柔道は人間技です。あれが柔道です。

能登「それで、柔道をヤメタの。

鶏乃「(苦笑いかな) いえ、柔道じゃ食っていきませんから。

能登「まあ、理想と現実つてところかな。

伊丹「だからといって俳優でも、食っていけるかどうか、ねえ。

能登「よく俳優になろうなんて思ったね。



鶏乃「成り行きですよ。私は、撮影所でセット組みの裏方やってみましたから。

伊丹「それがまた、どうして。

鶏乃「ヤクザ映画で本番付きになってた時に、急に用心棒役のワキの方が、生牡蠣食って中毒で来られなくなったんです。けれども、そのシーンはその日にしか撮れない事情があったらしくて、監督のほうから、お前とにかく背広に着替えて立っててくれって、そういうわたんです。衣装さんが背広持ってきて下さって、で、親分の傍に立ってるだけでイってことで、そこに警官隊がなだれ込んできて、全員御用になるんですけど、まあ、逮捕される前にちよつとした抵抗シーンがあつて、乱闘になるんですが、

能登「ああ、あのエピソード、新ちゃんだったのか。

伊丹「何よ、エピソードって。

能登「投げたんだよ、警官を。

鶏乃「つい、手が動いちゃって、

伊丹「捕まるはずが、投げちゃったの。

能登「それも、大部屋の警官隊を全員投げたんだ。

伊丹「ええっ、全員。初耳だなあ。

能登「内部機密らしいよ。怪我人出たらしいから。まっ、俺は地獄耳だからネ。

伊丹「そうかあ。

鶏乃「解雇処分かと覚悟してたんですけど、アトから監督と社長とに呼び出されて、ガツクリしながら社長室いったら、お前役者やってみんか、そういわれて。

伊丹「そういわれて、日本アカデミアン映画賞の助演男優賞を辞退するほどのエライ俳優さんにまで、駆け上ったと。

能登「なんで、助演男優賞、辞退したの。

鶏乃「オレは監督さんのいうとおりに動いているだけですから、なんつうか、演技っていうんですか、そういう芝居なんか出来ないですから。やってないですから。

能登「にしても、

伊丹「ねえっ、

大造「(急に)あの、あなた、たしか、鶏乃新さんとかいうんじやありませんか。

鶏乃「そうですが。

大造「私、あなたの出た映画、観ましたよ。

鶏乃「えっ、そうなんですか。

大造「ええ。」

鶏乃「それは、どうも。」

大造「タイトルは『大地を蹴飛ばせ』だったかな。観たっていつても、本島の取り壊し直前の二番館でなんですけど。すいませんね。」

鶏乃「いえ、とんでもナイ。」

大造「土砂降りの雨の中で、恋人に死なれたか、ナンかだったと思うんですけど、ぬかるみの地面、泥まみれで転がり回って泣くシーンありましたよね。」

鶏乃「（思い出しているのか）ええ、やりました。」

大造「良かったなあ。」

鶏乃「（やや、沈黙しているが）ありがとうございます。」

大造「ああいうときって、ふつう役者さんは悲しい顔するでしょ。だって泣くんだから。でも、チガッテましたよね。悲しい顔なんかしないで、何かに怯えるような目つきしてたのも、監督さんのいう通りなんですか。」

鶏乃「（暫し大造をみるが）いや、いや、ええそう、そうです。」

大造「あそこ、あれが良かったんだなあ。好きだなあ、あのシーン。」

能登「名優じゃん。」

伊丹「隠れキリシタンもいれば、隠れファンもいるんだね、故郷の島に。」

大造「お客さん方は、東宝ですか、東映ですか、松竹のほうですか。」

伊丹「いや、そんな大手じゃナイんだ。弱小プロダクション。それにね、素人さんにはワカンナイだろうけど、大手は今直接に映画製作はやらないんだ、殆どね。たいてい、どっかの製作プロダクションが企画出して、テレビ局やら出版社やらがスポンサーになって、そのプロダクションが創って、まあ、配給だけは大手がやるの。とはいえ、みんなシネコンだけだね。」

大造「そうですか。」

伊丹「なんだか、映画業界もこんがらがっていてね、いつときはテレビに押され、お次はレンタルビデオに押され、さらにネット配信ときて、それでも日活さんなんかは映画会社の中で孤軍奮闘してたほうかなあ。ゴルフ場とかに手を出さなかったら、裕次郎とか、旭とか、小百合とかで、映画そのものは黒字だったのにねえ。最後まで助監督を採用していたのは日活さんだけじゃなかったかなあ。俺も、ロマン・ポルノの助監督についたこと、あるのよ。あの頃は、貧乏、低予算だったけど、監督やスタッフはやる気があったなあ。」

映画業界そのものは、いまはシネコンがあるから、イオンシネマやら、T O H Oシネマズやら、松竹さんなんかはけっこううまく立ち回ってるみたいだなあ。まあ、そんなこんなでなんとか持ち直してんのよ。とはいえシネコンも飽和状態で、頭打ちだけだね。デジタル化やら、統合とか再編とか、昨今は実写よりアニメかなあ。まあ、相変わらずこんがらがってるけどね。まあ、そういうことで我々も、こんがらがりつつも、まだ映画が撮れるんだけどね。

能登「こんがらがってるのは、伊丹さんの話のほうだよ。何の話かワカンナイよ。

伊丹「えっ、そうかな。

能登「そうか、あなたの映画がいつもこんがらがってるように感じるのは、あんたがこんがらがってるだけなのか。

伊丹「こんがらがってナイよ。

能登「こんがらがってるヨ。

伊丹「能登ちゃんのホンだって、けっこうそういうの多いじゃんか。

能登「俺のは、わざとそういうふう書いてんの。時系列を錯綜させてるワケ。シークエンスとプロット、シーンとカットのマジックなんだけどなあ。

伊丹「また、難しいこといって誤魔化してんだから。

大造「(ドライバー片手に、エアコンの点検しながら) ちょっと錆も出てるなあ。部品は何とかなりそうですけど、冷媒が駄目なら、適当な入れ替えますかねえ。

能登「出来るの。

大造「R32(サンニ)ってワケにはいきませんが、R717(ナナイチナナ)、アンモニアのことですけど、それなら手持ちがあるにはありますから。

伊丹「R32とどうチガウの。

大造「R32はダイキンさんの開発ですから。

伊丹「ダイキンさんの専売特許なの。

大造「いえ、ダイキンさんはどこへでも提供してますよ。いちばん地球のオゾン層を壊しにくい冷媒です。ダイキンさんのは冷え方もチガイしますから。

能登「ほーお。

伊丹「ああ、それぞれ。むかしだと、いまみたいなせりふをワンカット入れるだけで、セツトが一つ出来るくらいのスポンサーになってくれたんだけどなあ。

大造「そうなんですか。

伊丹「そうよ。鈴木清順監督の『東京流れ者』の中で、松原智恵子が何の意味もなく、どこだかのメーカーのヘアー・ドライヤー使うワンカットがあるんだけど、あれで、セット一つ組めたって聞いているよ。

大造「渡哲也さん主演のあれですか。

伊丹「そうそう。

大造「真っ白な雪ん中に、赤提灯が突然出てきたりするアレでしょ。観てますよ。それから『夢二』でしたっけ、毬谷友子さんが、真っ黄色のボートで湖を疾走する、あれも私、好きですよ。

能登「あのシーンいいよな。『夢二』は田中陽造さんがオリジナルで書いてるからなあ。

『東京流れ者』は川内康範さんだけど、せりふが変なんだ。変なんだけど、ナンダかオモシロイのよ。あれは清順監督が現場で即興で創ったんじゃないかな。えーとね、冒頭でね、（その気に構えて）「いや、いまにきつと暴れ出す。ヤツは三度転んで駄目だとわかると、ハリケーンを吹かす男だ。」（クツクツと笑いつつ）「いいだろ。」

大造「ああ、いいですね。

伊丹「いいねえ。ハリケーンを吹かす男だ、か。

能登「どういう男なんだろうね。

伊丹「ハリケーンなんでもんね。

大造「台風来てますけどね。

伊丹「まさか、あんたが呼んだんじゃないんですよ。

大造「アタリマエですよ。

能登「伊丹さん、ナニいってんのよ。

伊丹「いや、ハリケーン吹かすことも出来るのかなと思って。

能登「出来るワケないじゃん。

大造「でも、私の友達に、台風が呼べる男がいました。

伊丹「台風、呼ぶの。いるんだ、そういうの。

能登「おい、それじゃあ、石原裕次郎の『嵐を呼ぶ男』じゃないの。あれは、ドラム叩くだけだけど。

伊丹「ほんとに呼べるの、そのひと。

大造「ええ、太平洋上に熱帯性低気圧が発生すると、よし、これ台風にしてこっちへ呼ぶぞって、そういって、ほんとに日本に上陸させちゃうんです。

能登「ほんとかな。」

大造「確率としては、六割はありました。」

能登「普通、太平洋上の熱帯性低気圧の六割は台風になって日本に来るよ。」

伊丹「ああ、そうだ。そんなもんだよ。」

大造「石原裕次郎さんの日活映画で、クライマックスが台風の映画ありましたよね。」

伊丹「あるよ。『風速四十米』でしょ。」

大造「あの主題歌がまた、変だけど決まっちゃいましたねえ。」

伊丹「どんな歌だったっけ。」

能登「せりふの入るアレだろ。最初こういうんだよ。くなんだいありや、ナニ、風速四十米？アハハくだろ、で、途中のせりふが、くおい、風速四十米がなんだってんだ、エツ、ふざけるんじゃないやねえよ、最後が、く馬鹿野郎、風速四十米が何だってんだ、アハハく

伊丹「（軽く歌う）カみんな、飛んじゃえ 飛んじゃえ 俺は負けないよ、だ。」

大造「（大声で歌う）カ風が吹く吹くくやけに吹きやがるとく風に向かって歩きたくなるのさく。スゴイ歌でしたねえ。」

伊丹「あなたの歌のほうのスゴイよ。」

大造「台風に向かって歩くひとなんて、もういませんよね。」

能登「むかしも、そんなひと、いなかったよ。」

伊丹「あんた、好きなんだね、映画。」

大造「ええ、大好きです。」

伊丹「俳優さんは誰が好きなの。」

大造「日本のですか。」

伊丹「あらら、そのいい方、洋画も観てますよって主張かい。」

大造「いや、そんな。洋画はもう、デュヴィヴィエが好きなくらいで。」

伊丹「いうよねえつ、ジュリアン・デュヴィヴィエときたよ。」

能登「『旅路の果て』、『巴里の空の下セーヌは流れる』、『わが青春のマリアンヌ』。大造

「俳優さんは主役の方より、脇役の方が好きですね。」

伊丹「これまた、渋いね。で、誰なの。」

大造「いま、ちよっと名前が思い出せませんが、舞台もおやりになってる、あの、えーと、時代劇なんかにもよく出てらっしゃる、コメディからシリアスまで、ちよっと目つきは悪いんですが、寝惚けてんのか真面目なのか、えーと、えー、

伊丹「いいよ、もう、思い出さなくても。」

大造「えー、あ、そうだ、たしか、「え」で始まる名前だ。」

伊丹「ワカッタ。」

大造「ご存知ですか。」

伊丹「『江頭 2:50』だな。」

大造「いや、そんなにエキセントリックじゃなくて、

能登「もういいよ。映画談義はイイからさ、このスゴイ暑さを早くなんとかしてくれないかな。」

伊丹「喉渴いたなあ。ねえ、どう。」

能登「よし、ビール、頼もう。」

伊丹「そうだね。そうだよ。(とまた内線かけるが)・・・出ないんだよな。」

能登「新ちゃん、下いって、貰ってきてよ。」

鶏乃「いいですよ。」

大造「ああ、私、貰ってきましょうか。(というが早い、もう脚立を降りて、廊下に去っていつてる)」

能登「おい、

伊丹「修理以外は行動が素早いね。」

能登「きつと、自分が飲みたいんだろ。待ってたんだよ、こっちがいい出すのを。」

トントンと階段を昇ってくる音。大造、ビール瓶二本とコップを三つ手にして、戻って来た。

能登「早いねえ。」

伊丹「早い。」

能登「その早さで修理のほうもやってもらいたいんだけどね。」

と、いいつつ、二人コップを手にすると、大造がビールをそそぐ。鶏乃のコップは机に置かれたままだ。それにも注ごうとするが、

鶏乃「ああ、私、飲めませんから。」

能登「自転車屋さん、あんた飲んだら。」

大造「いや、私もアルコールは駄目なんです。」

伊丹「あっそ、変なの。」

「けっこう泡立つビール。」

能登、一口いくが、

能登「何だよ、これは。冷えてナイじゃん。妙に泡が多いと思ったら、ぬるいよ。」

伊丹「(飲んで) あっ、ほんとだ。」

大造「冷蔵庫が空だったもんですから、ケースの持ってきたんですけど、やっぱり駄目でしたか。」

能登「駄目だよ、そんなの。」

伊丹「ナイよりマシかな。」

能登「ナイほうがマシだよ。」

伊丹「でもさ、ビールを冷やして飲むのって、日本だけだって聞いたよ。」

能登「そんなことナイでしょ。」

大造「西部劇なんかで、カードなんかやりながらビール飲むシーンが、ウエスタン・ドアのある酒場なんかに出てくるでしょ。あの時代、冷蔵庫ないのに、どうやってビール冷やしてたんでしょうね。」

伊丹「そうでしょ。冷蔵庫なんかナイよね。氷なんかつくれないだろうし。やっぱ、常温で飲んでたんじゃないかな。」

能登「水につけるくらいはしてたんじゃないの。」

伊丹「でも、樽からこう管があって、それでこうレバー押して、ジャッって生ビールみたに出すじゃナイ。瓶ビールじゃナイんだから。どうやって冷やすの。」

鶏乃「そういや、ニューヨークに行ってビール飲んだ友達が、冷えてなかったっていうの聞いたこと、あります。」

能登「そうそう、イギリスの知り合いにビール出したら、coldって驚いたことがあったなあ。やっぱ常温なのかねえ。」

伊丹「そうでしょ。」

能登「だからって、これは常温じゃナイよ。あつたまってるもん。温爛(ぬるかん)のビ

ールなんて聞いたことも、飲んだこともナイよ。

伊丹「常温なら許せたんだけどね。赤ワインも冷やさないからさ。ビールの飲み加減のは、ほんとは何度くらいなのかねえ。

鶏乃「10度前後じゃナイですか。

伊丹「へーえ、そうなの。

鶏乃「すいません、いまのはちよつと、そう思っただけで。

伊丹「そうだよね、飲めないんだもん。

鶏乃「ビール樽を地下倉に入れておけば、そんな程度かなと。

能登「どうでもいいけどさ、ちよつとき、冷房の効いた店いつてさ、冷たいの飲もうよ。

伊丹「そうだね、エアコン直るまで、こんな暑いところで我慢することナイよね。

能登「ねえ、近場でどこかい店、ナイの。あんまり歩くのはイヤだよ。

伊丹「この島の名産物とか食わせてくれるところ、とか、あるでしょ。近場でさ。

大造「『四国うどん』という店があつたんですが、

伊丹「四国うどん。ここ離島だけど、一応鹿児島でしょ。

能登「なんで、四国うどんが名物なのよ。

伊丹「四国のうどんが名物なのは知ってるよ。讃岐うどんでしょ。四国のひとたちは、コーヒーブレイクの代わりにうどんブレイクするって聞いたよ。一日一回はうどん食べるんだってね。

能登「いや、それはワカル。『うどん』っていう映画あつたでしょ。センスのいい、茶めっ気のあるオモシロイ映画だったんだけど、大コケしたらしいよ。あそこのプロダクションの、金城武と鈴木杏ちゃん主演の『リターナー』(Returner) っていうのも良かったねえ。日本映画じゃナイみたいな quality だよ。

鶏乃「それもヒットしなかったんじゃないですか。

能登「うん、しなかった。なんか、ヒットしないんだなあ。マニアックなのかねえ。

鶏乃「『K-20 (トゥエンティ)』もでしょ。

能登「あれはシリーズ化するつもりで、ラストシーンがそんなふうに創ってあるんだけど、興収で20億稼いでも、製作経費と宣伝経費で20億使ったらしいから。

伊丹「あれも、日本映画って感じじゃなかったんだけどねえ。

大造「難しいですね、ヒットさせるのは。映画館一日の売り上げが、パチンコなら一台で稼げるって聞きましたよ。



伊丹「何がヒットするか、俺たちプロでもワカンナイからねえ。

能登「そんなことはイイんだよ。その四国うどんがどうして名物なの。

大造「ええ、四国のほうへ嫁に行つた島の娘（むすめ）が、こっちに戻つて来たんです。交通事故で亭主に死なれたそうで、仕方なく。

大造は作業を続けている。

鶏乃は、立ち上がつて次間からぼんやりと海を眺め始めた。

伊丹「まあ、いろいろ、事情と都合はあるよ。

大造「ですよね。

能登「その辺の事情、省いていいよ。それで、

大造「ええ。その娘（こ）が四国で亭主とうどん屋やつてたんですが、この島に帰つて来てからも、門前の小僧で、うどん屋始めたんです。

伊丹「門前でうどん屋、どこのお寺。

能登「伊丹さん、もう無知丸出しやめなよ。それとも、ジョークのつもりい。

伊丹「だって、門前の小僧って、

能登「門前の小僧、習わぬ経を読むですよ。ほんとにどうして、伊丹さんてさあ、驚くほど教養がナイのかなあ。あれだろ、四国で亭主のやつてたのを見よう見まねで、うどん屋始めたら、これがヒットしたんだろ。

大造「そうなんです。

能登「やっぱいい。そうだよなあ、ヒットするものはヒットするんだよなあ。ヒットの神様っているよ、きつと。

大造「テーブルが二つ、あとはカウンターで、十人も入れれば満員になる小さな店で、その娘が、出前までやつてたんですけどね。気さくで、まだ頬つぺたの赤い、性格のイイ娘だったんです。四国に嫁に行く前は身寄りには伯母だけで、二人暮らしだったんですが、その娘が嫁に行ったんでほつとしたのか、伯母のほうはすぐに亡くなりました。

伊丹「そうかあ、天涯孤独ねえ。ヒロインとしては申し分ナイね。

大造「客は、島民から釣り客やら宿泊客まで、引きも切らずでした。その店の一番人氣が「かやく定食」でしてね、かやくご飯とうどんのセット。これがなんと360円。この、かやくご飯が美味くてねえ。ちゃんとオコゲがあるんですよ。これがなんともいえな

です。私も通った口です。

伊丹「ご飯のおコゲはイイねえ。いまはなかなか食べないよなあ。

大造「電器釜ですから、コゲませんよ。

能登「いまのひとは、電気釜なんていわないよ。電気炊飯器だ。

伊丹「そうそう。炊飯器。

大造「ちよっとご飯がコゲル程度に炊かれてるんです。かやくご飯大人気で、繁盛してましたよ。

能登「そんなに繁盛していたのに、ところが、何故か突然閉店した。そうなんだろう。

大造「そうです。ワカリマスか。

能登「まあね、これでも、シナリオ書いて30年だから。

伊丹「深まる四国うどんと「かやく定食」の謎か、いや、能登ちゃん、さすが。

大造「何故か閉店、ということでもナイんです。

能登「えっ、そうじゃないの。

伊丹「ナンダ、理由はあるんだ。

大造「ええ、たぶん、ご覧になったかと思いますが、船着き場から、こっちに来る道筋で、山側の方、左手の方角にちよっと変なのが建ってたでしょ。

伊丹「変なのって、どんなの。

能登「男、女。

大造「いえ、建物です。

伊丹「ナンダ、建物か。

能登「ああ、あれか、あの、妙なマンションだからレストランだか、誰も住んでナイのがいつぺんにワカル、廃墟みたいなのがあったな。

伊丹「そういや、こんな離島には似つかわしくないってのが一軒あったね。ロケーションは良くなかったよ、たしかに。

大造「あれね、本島のほうの金持ちが建てたんです。離婚したかなんかで、中学生と小学生の子二人連れて、こっちにチョコチョコ来てたんですが、その四国うどんてのが、そこの一階の一部屋の三分の一を改装して借りて営業してたんです。

能登「ワカッタ。みなまでいうな。30年の筆が語ろう。そのリンゴの頬っぺの娘さんに、大屋の金持ちが惚れたんだな。そうだろう。

大造「そうです。

伊丹「能登ちゃん、さすが。それで押し倒すんだ。リンゴの頬っぺを手込め。ヤメテツ、オトナシクシロツ。

大造「いや、それはなかったと思います。

能登「ナイよ、そんなものは。それこそ、ロマン・ポルノじゃナイんだから。

伊丹「じゃあ、あくまで松竹かな。小津だ。小津落語、ゴキウ人情映画だね。

大造「それでもナイんです。

能登「小津落語でもナイ。

大造「ちゃんと結婚するんです。

伊丹・能登「ほーっつ。

能登「まあ、どっちも離婚してんだからな。

大造「とはいえ、『四国うどん』は閉店。500人の島民と、釣り客たちの常連さんたちは、滂沱の涙を流したといわれています。

伊丹「たった一軒のうどん屋の閉店なのに、ねえ。

能登「滂沱の涙はオーバーだなあ。

大造「いや、それくらいの人気はあったんです。

伊丹「そうでしょう、そう思うよ。でも、小津落語じゃナイんでしょ。

大造「ここからなんです。

能登「おい、ナンだよ、そのハナシの進め方。気を持たせ過ぎ。

大造「すいません、どうも、こういうの好きなほうですから。(と、どういう心境か、脚立から降りてくると、能登のコップのビールを手にとって飲む) ああ、ほんとだ。温(ぬる)。

能登「あれ、飲めるの。

大造「温いのはどういうワケか。やっぱり、こういう話は一杯引っかけないと。

能登「変なひとだね。

伊丹「で、そこから、どうなの。

大造「ええ。でね、大屋の野郎がね、いくらなんでも、もううどん屋はやめてもらいたい、と、そういったんです。

伊丹「そりゃそうだろう。

能登「大屋ってのは何の仕事してたんだ。

大造「金融関係だっていってましたよ。

伊丹「金融関係ねえ。

能登「金融関係なんてのは、ピンキリだからなあ。

大造「でもですね、その娘（こ）は、やっぱり、お店がやりたいと、それを結婚の条件にしたようなんです。

伊丹「慕ってくれていたお客を放っぱりだせなかつたんだなあ。優しい娘だねえ。

大造「そこで、マンション改築して、家族は二階をワンフロアにして住んで、一階を大きなレストラン喫茶にしたんです。

伊丹「えっ、四国うどんじゃナイの。

能登「だから、それはもう閉店だろ。

伊丹「いやあ、しかし、アレは。あんなレストランてのはねえ。

能登「そうだよな。こんなちっちゃい島に、あんな大きな、アレじゃあ。

大造「そうです。もともと損金づくりのための事業だったと私は考えますが、客なんて殆ど来ませんよ。

伊丹「だろうね。

大造「私も、あれだけの喫茶レストランとなると足が遠のきました。でも、二、三度、覗きはしたんです。そうしたらですね、驚いたなあ。いやあ、驚きました。あのリンゴの頬っぺの娘がですね、太股までスリットの入ったチャイナドレス着て、店内を歩いてました。

伊丹「チャイナドレス。

能登「太股スリット。

伊丹「どうしちゃったのよ、リンゴの頬っぺ。

大造「それは、私のほうが聞きたいですよ。

能登「ワカッタ。大屋の趣味だ。

伊丹「そう。それだ。スケベっ、

大造「と、私も最初はそう思ったんですが、あながちそうでもなさそうで、リンゴ頬っぺの娘は、けっこう嬉しそうにしてんです。

伊丹「あれま。

能登「これま、だな。

大造「ワカンナイもんですね、女性の趣味というか願望ってのは。化粧も濃くなって、リング頬っぺじゃなくなりましたから。

能登「女はワカラナイんだよ。

大造「そうなんですかねえ。

伊丹「ワカラナイねえ。

大造「それにですね、いきなり、中学生と小学生の男の子の二人の母親にされちゃったワケでしょ。これがうまくイカナイ。

伊丹「イカナイよ。

能登「ちょうど、難しい年齢だもん。

大造「喫茶レストの二階からは、夜でもヒリックに子供を叱りつける彼女の声が絶え間なく聞こえてきましてね、私も心を痛めました。ああ、あの娘が、あんなふうな金切り声を出している。あんなに優しい娘だったのに。

伊丹「ガキが悪いね。反抗期という、あれだね。

能登「悪ガキだよ。継母に、反抗するんだな、きっと。

大造「で、彼女を怒鳴る金融大屋の洞間声も聞こえるんです。

伊丹「最悪。

大造「無残です、悲惨です、残酷です。

能登「彼女は、男運がなかったんだな。

伊丹「いやあ、ヒドイ話だったねえ。そうだったんだ。ふーん、自転車屋さん、あのマンションの傍にでも住んでんのかい。

大造「いえ、離れてますけど。

伊丹「じゃあ、わざわざ偵察でもしてたの。

大造「偵察。ナニ、いってんです。そりや、チガイマスよ。私の仕事は昼夜、配達とか修理とかありますから、通りがかるだけです。それにですね、この悲劇は、まだ終わりじやナイんです。

能登「おい、ちよっともうナンなんだよ。

伊丹「まだ、続きがあるんだ。

能登「引っ張るねえ、もう。で、

伊丹「どうしたの。

大造「男が出来たんです。

伊丹・能登「えっ、

伊丹「元リングの頬っぺ、新妻、継母、チャイナドレス切れ込み太股にかい。

能登「長いね、伊丹さん。

伊丹「さらに付け足せば、天涯孤独、元四国うどん屋のマドンナ、玉の輿レストラン喫茶のママにかい。

能登「そうなるか。

伊丹「そうなるよ。

能登「男か。

大造「その男と一緒に逃げたんです。駆け落ちです。

伊丹「アラッ、て、イスラム教じゃナイんだけどね。

能登「しかし、アラアラアラだな。シャボン玉ホリデーだ。

大造「まあ、こんな離島ですから、出て行こうとすりや、何処へでも行けますからね。相手の男がどんなのかは、いまだにいろいろと噂でしかワカンナイんですが、船乗りというものもありますし、暴力団の三下というのもあります。まともなところでは、島によく立ち寄る営業マンとか釣り客。

伊丹「船乗りは、港港に女がいるっていうからねえ。三下はもう、どうにもならないけど。

能登「営業マンも、ピンキリだからなあ。

伊丹「何でもピンキリだね。

大造「映画監督も、脚本家もピンキリですからね。

伊丹・能登「(頷いてしまう) うん。んっ、おいつ。

大造「あっ、どうもスイマセン。

伊丹「いやまあ、その通りなんだけどね。

能登「我々はピンのほうよ。

伊丹「そうそう、ピンよ、ピン。

大造「ピンといっても、ボーリングのピンやら、髪の毛を留めるピンもありますから。あっ、またどうも、すいません。つつい余計なことというのが、私の悪い癖です。でも、けっこう、いい得て妙って評判なんですけど。

伊丹「いい得て妙ね。まあ、いいや。

能登「リングはついに、悪い男と逃避行か。

伊丹「(歌う) ♪私は真っ赤なりんごですくお国は遠い鹿兒島でく悪い男に連れられていったっちゃったあ、(童謡『りんごのひとりごと』と『赤いくつ』が交じっている)

大造「そうして、ですね、

伊丹「えっ、まだ、続きがあるのっ。

大造「ええ。

能登「ヒツパリに引っ張るねえ。

伊丹「どうなんの。

大造「その娘（むすめ）、一人でこっそり帰って来たんです。二年半くらい前ですか、隠れるようにして。もう、悪徳金貸しの大屋は家族で本島に引越して、島に住んでいませんでした。あのマンションだって入居者も無くなって、いまでは、あの如しです。

能登「金融業が悪徳金貸しになったか。強調しちゃってるな。

大造「島民のあいだでは、そういわれてるもんですから。島民の中にも、けっこう泣きをみているものが、いるんですよ。

伊丹「サモ・ハンキンポー。いやいや、さもありなん。そうなるんだろうなあ。

能登「リングは逃げたが、結局は男に棄てられたんだ。身も心もボロボロだなあ。

大造「私の勘では、あの蛇蝎の大屋は、債権の取り立ての請負をやってたんじゃないかと思うんです。借金のカタに女や子供を売り払ったり、臓器売買はアタリマエ、たぶん、保険金殺人にも手を染めてたと思われる。逃げるのはアタリマエですよ。

能登「蛇蝎の大屋ねえ。今度はダカツか。へびにサソリだ。

伊丹「でも、保険金殺人までは、いくらなんでも。

大造「いや、私の勘はよくアタリますから。

伊丹「で、娘は、いまだにひっそりと暮らしてるワケ。

大造「いいえ、

伊丹「チガウんだよねえ。

能登「やっぱりなあ。

伊丹「どうしてんの。

大造「死にました。

伊丹・能登「ええっ。

大造「二年前に、こっちのほうで大水害がありましたね、ご記憶にありますか。

能登「うん、待てよ、ああ、あの土砂災害か。

伊丹「あった、あった。大雨、土石流。土砂崩れ。しばらくニュースでやってたアレだ。

大勢亡くなったんだ。南無阿弥陀仏。いや、キリシタンだから、アーメンかな。

能登「まさか、それで。

大造「ええ、生き埋めになって、（死に掘り出し）でした。

伊丹「アラーツ、といってもイスラム教じゃナイんだよ。

能登「死に掘り出しね。まあ、生き埋めで、掘り出される時には死んでるから、死に掘り出しともいえるけど、ふつうはご遺体発見でしょ。

大造「ご遺体が発見されました。非常持ち出しの袋抱えてたそうです。

能登「わりに現実的だな。非常持ち出しは持ち出したんだ。

伊丹「ねえねえ、(と、能登に)

能登「え、ナニ。

伊丹「やっぱり、ロザリオを胸に抱いてのほうが良いかな。

能登「そうねえ、映画だからねえ。(大造に)その娘(こ)の先祖は土着、それとも流入のほうなの。

大造「さあ、どうでしょう。

伊丹「まあ、あれだなあ。人生いろいろだねえ。四国うどんであれば、私たちも今日なんかはそこで、りんご頬っぺの顔みながら、冷たいビールといけたんだねえ。それが死に掘り、いや、ご遺体になったか。

大造「あの大水害はヒドかったです。山の斜面の墓も殆ど流されて、棺桶から人骨がはみ出しましたから。

能登「人骨。

伊丹「髑髏(しやれこうべ)。

能登「棺桶。そうか土葬なんだ。キリシタン、いやクリスチャンだから、そうなんだな。

大造「一応、規則ですから茶毘には付すんですけど、骨はそのまんまのカタチで棺桶に入れて全部埋めます。

伊丹「せめて、そんなふうにするんだ。普通は、普通は、えっ、だったら普通あの、骨拾いして残った骨はどうしてんだろ。

大造「粉にして田畑に撒く肥料と交ぜますけど。

伊丹「えっ、へーえ、あの残りの骨、肥料になるんだ。

大造「私んところはそういう肥料も扱ってます。

能登「まさに土に帰る、あるいは塵に帰るか。クリスチャンだから、「塵より出て塵に帰る」だね。

伊丹「能登ちゃん、また、教養みせちゃって。それって、聖書か何かにあるの。

能登「創世記第3章19節、「あなたは顔に汗してパンを食べ、ついには地面に帰る。あな



たはそこから取られたからである。あなたは塵だから塵に帰る。どうだつ、30年のシナリオ稼業の力業だ。

大造「それは、仏教とよく似ているところですね。

伊丹「わかった。色即是空、空即是色だ。

大造「というか、世間虚仮（せけんこけ）、唯仏是真（ゆいぶつぜしん）かな。聖徳太子がいったコトバらしいです。この世は仮の世で虚しい、仏にすぎる他はナイと、そういうことでしょう。

能登「いやあ、あんたもスゴイね。そういうの自転車屋やってて何処で勉強したの。

大造「好きなんです、歴史。小学校の頃から。

能登「それで、あれか、この島の隠れキリシタンとか、知ってたんだ。

大造「いや、まあ、お恥ずかしい知ったかぶりですけど。

伊丹「ちよつと、一人の教養に嫉妬したらしい）ああ、虚しい。虚しいねえ。けど、暑いよ。暑いのはどうなんの。

能登「そうだよ、暑いよ。暑いのはちつとも改善されてナイ。世界が虚しいのは耐えようもあるだろう、しかし、世界が暑いのは耐えようがナイ。

伊丹「それも、どなたかのオコトバなの。

能登「なんか、ありそうじゃナイ。調子こいていえば、「耐えよう」がナイのは、北欧の白夜だ。てのはどうかな。

伊丹「ワカッタ。空にたえよう「太陽」がナイ。白夜だから。

能登「おっ、伊丹さんにしては冴えてる。

と、鶏乃が割り込んできた。

鶏乃「白夜って、太陽がナイんじゃないなくて、沈まないんじゃないなかったですか。

能登「あっそうか。

伊丹「猿も木から落ちる。

能登「弘法も筆の誤りか。

鶏乃「白夜って、ビヤクヤじゃなくて、ハクヤが正しい読み方らしいですね。

伊丹「そう、ほんとはそうなんだってねえ。能登ちゃん、知ってた。

能登「物書きだよ、俺は。白い虎のことを白虎（ビヤッコ）とはいうけどね。そいで勘違

いしたんじやないのかな。

大造「何方が。」

伊丹「スゴク長生きされた偉い俳優さん。」

大造「そうですか。」

伊丹「(真似て歌う) ♪はるか 国後に ビヤクヤはあけるくって、歌っちゃったからね。放送局のほうは、それ、チガッテますとはいえなかったんだろっねえ。偉い俳優さんだったから。」

能登「それから、その放送局のアウンサー、みなさん全員揃って、白夜はビヤクヤと読むようになったらしいなあ。」

鶏乃「そうらしいですね。偉いひとはチガウってことですよ。」

能登「だからさあ、なんとかこのエライ暑さ、その北欧並みに涼しくなんないの。ねえ、どうなの。」

大造「あつ、すいません。もうちよつとですから、もうちよつとのご辛抱を。(慌てて脚立にもどった)」

能登「頼むよ、ほんとに。仕事しに来てんだからさ。」

伊丹「でも、能登ちゃん、もうプロットは幾つか出来てるんじゃないの。」

能登「どんな。」

伊丹「あのね、さっきのつづきで、リンゴの頬っぺの娘の悲劇を入れて、山の斜面の十字架が流されて、シャレコウベがこう、山になって、ね、絵になるでしょ。」

能登「そういうのがシークエンスになるワケえ。」

伊丹「ホラーならいけるような気がするんだけど。」

能登「ホラーはもう飽きられてるよ。」

伊丹「(脚立の大造に) ねえ、自転車屋さん、他に何かオモシロイ話、ナイっ。」

能登「このひとに訊くうっ。(憤慨というより、まあ、呆れている)」

伊丹「だって、いろいろ知ってそうだもん。ねえ、どうなの。」

大造「オモシロイ話ですか。そうですねえ、たとえば、邪馬台国は鹿児島にあったとか。」

伊丹「えっ、鹿児島にあったの、邪馬台国。」

大造「そういうふうにもいわれてます。」

能登「そういうの、駄目。邪馬台国所在地なんて、学者センセイから在野のアマまで、いたいこといって、あちこちに何十ヶ所もあるんだから。」

伊丹「でも、鹿兒島説もあるんだ。立派じゃない。

能登「立派って。

伊丹「候補地でしょ。

能登「それはそうだけど、初めて聞いたような気がするな。邪馬台国鹿兒島説ねえ。

鶏乃「その話、オレも子供の頃、聞かされましたよ。卑弥呼の墓だってあるっていわれますよ。

伊丹「ええっ、古墳まで。

能登「証拠の金印が展示されてたりしてんじゃないの。

鶏乃「レプリカなら展示してあるはずですよ。

能登「そこまでヤルか。

大造「鹿兒島説が正解かどうかは別にして、学説的には、邪馬台国についてはもう決着はついてるらしいんです。

能登「ええっっ、

伊丹「いくらなんでも、それはナイでしょ。

能登「その鹿兒島説ってのは、誰の説なの。学者、在野。

大造「『魏志倭人伝』に書かれている通りの場所が正しい、つまり『魏志倭人伝』そのものがマチガッテいないとすれば、という前提なら、鹿兒島県北西部の阿久根市辺りになるんです。張明澄（チャン ミンチョン）という台湾の医者で、古典文献学者というか、五術家の専門老師が『魏志倭人伝』を読解したらそうなららしいです。そのひとがいうには、『倭人伝』を正確に読んだ通りに進めば、勝手に解釈を変えたり、尤もらしいコジツケをしなくとも、無理なく、面倒もなく、そこにちゃんと行き着くんだそうです。

伊丹「そんなもんなんだ。

能登「『魏志倭人伝』が正しければという前提も、まあ、文献学者らしいな。さすがに歴史が好きなのは、邪馬台国はヤルんだねえ。

大造「いやあ、歴史好きなら誰でも一度は興味を持つことですよ。しかし、この説は、日本ではまったく無視されてるみたいです。もちろん考古学学会でも実証どころか相手にされてません。

伊丹「そのチャン老師の専門のゴジュツカって、ナニよ。

大造「それはですね、五つの術の家と書いて五術家。中国医学と易卦（えきげ）とか、そんな学問だって聞きました。奇門遁甲なんか入るじゃないですかね。

伊丹 「へーえ、漢方薬に占いか。

鶏乃 「監督、それは誤解ですよ。

伊丹 「誤解、何が。

鶏乃 「漢方薬は中国医学じゃアリマセンよ。

伊丹 「おやまあ、それは新説かい。

鶏乃 「いや、ただのマチガイです。でも、たいていのひとは、そう思ってるからなあ。

能登 「つまり、漢方薬は中国で創られているクスリではナイと、そういいたいんだな。

鶏乃 「そうです。

伊丹 「じゃあ、ナニ。

鶏乃 「日本のクスリです。

能登 「ワカルように説明してよ。

伊丹 「そうそう。

鶏乃 「ワカルようにも何も、日本のクスリには、西洋医学から輸入されたもの、開発されたものと、生薬と漢方薬があると、それだけです。

伊丹 「それだけじゃ、ワカンナイよ。

鶏乃 「だって、中国には漢方薬なんてアリマセンよ。

能登 「おいおい、ますますワカンナイな。

鶏乃 「ですから、日本のクスリなんですよ。

伊丹 「そこがワカンナイのよ。

鶏乃 「日本人が生薬を二種類以上、調合することによって創っているクスリだから、日本のクスリだということです。

能登 「ネットで検索したような答だな。

鶏乃 「うちの母方の実家は漢方薬薬局でした。いろいろな生薬とか、薬草を、薬研（やげん）で砕いて擦りおろして、漢方薬創ってました。

大造 「漢方薬屋さん、でしたか。

鶏乃 「はい。

大造 「そうですね、日本人は漢方薬を誤解してますねえ。

鶏乃 「でしょ。

大造 「副作用がナイとか、長く飲まないと効果が出ないとか、生薬と一緒にしたりとかねえ。中国のクスリだと思ってるひとが殆どでしょうねえ。

鶏乃「いまは、日本の医者も漢方薬を勉強してるひといますから、医者によりますが、保険のきく漢方薬出しますよ。即効性のももありますし、一週間服用して効果が無ければ、クスリを変えます。漢方薬剤師と相談しながら、ガン患者さんだって、使ってます。たとえば、補中益気湯（ホチュウエキトウ）と紅参末（コウジンマツ）は免疫を上げます。神経科だって、人参養榮湯てのを出します。ストレスからくる疲労に効果ありますから。伊丹「鶏乃くん、きみ、俳優やめても、漢方のほうで食っていけるんじゃない。鶏乃「いやあ、叔母のところ、ちよっと習っただけです。

伊丹「へーえ、そうなの。漢方薬って日本のクスリなの。いやあ、ビックリ。

能登「まあ、いずれにせよ、専門が医学に占いじゃあなあ。その邪馬台国鹿兒島説は相手にされないな。

伊丹「でも、文献学もやるんでしょ、その五術家のセンセイってのは。

鶏乃「邪馬台国についてはとくに決着ついてるって話は、大学の頃、古代史やってる中堅どころの准教授がいましたよ。けれども、学会は北九州派と畿内大和派とで、大センセイたちの派閥が絡んで、どうもあれこれ面倒なんだとか、そんなこともいつてました。大先生の説に反証したりすると、出世が遅れたりとか、研究費削られたりとか。偉いひとというのは、俳優でも、学者でも困ったもんですね。

能登「でも、ほんとかなあ、邪馬台国がこの近所にあつたなんてねえ。

伊丹「あの、南と書かれた方角がマチガイで、ほんとは東に行つて畿内大和に行くとか、水行（スイコウ）十日陸行（リクコウ）一月では海ん中に出ちゃうとかは。

能登「それよそれ、他にも研究してるひとの数だけ、都合のいい読み方があるんだな。俺の知ってる限りでは、もうあちこち邪馬台国だらけ。

大造「張明澄さんというには、日本の学者は正しく中国語が読めてナイと、ただそれだけらしいです。それにですね、意外に知られてナイですが、鹿兒島人のことを薩摩隼人っていうでしょ。この隼人って鹿兒島の古代名称らしいです。

伊丹「へえ、そうなんだ。ひとの名前かと思つてたけど。

大造「大和朝廷に最後まで抵抗していた地方なんだそうです。隼人が完全に大和朝廷の支配下に入ったのが、養老4年、720年の大和朝廷の大遠征の後、とかいう資料が本島の資料館行けば読めますよ。それに鹿兒島県には、古事記や日本書紀にある、『海幸彦・山幸彦』の伝説が残ってるんです。

能登「歴史好きにしても、えらく詳しいねえ。

大造「これは本島の歴史資料館のほうで調べたんです。

伊丹「自転車屋さん、そういうところにも行くんだ。歴史好きって、けっこうのめり込んじゃうひと、多いもんね。

大造「私は、下手の横好き程度です。

能登「エアコン修理が下手の横好きじゃ困るよ。皮肉でいうんだけどさ。暑いんだよ。

伊丹「暑いよなあ。まだ、直りそうな気配ナイね。

大造「すいません、これでも頑張つてガチャガチャやってんですから。

能登「ガチャガチャじゃ、直んないよ。

大造「ええ。ワカッテます。もうすぐですから。

伊丹「でもさあ、『海幸彦・山幸彦』の伝説って、あれは鹿兒島の話だったんだね。ふーん。意外と知らないもんだねえ。

能登「まあ、それはそれでオモシロイかも知れないけど、邪馬台国はちよつとどうかねえ。

伊丹「リンゴの頬っぺに邪馬台国を発見させるワケにもいかないし、その娘が卑弥呼の子孫だったなんてことにするのかい。

能登「いやあ、突飛過ぎるよ。

伊丹「というか、陳腐。

大造「ですよねえ。あの娘が卑弥呼の子孫だなんて、そんなことあるワケないです。

伊丹「ナンか、妙に確信にみちていうねえ。

能登「それも調べたりしたの。

大造「ナイです。あの娘が卑弥呼の子孫だなんて、絶対ナイです。そんなことは大嘘ですよ。

伊丹と能登、怪訝な気持ちで顔を見合わす。

やや黙々とした間があつて、稲光がする。

大造 「台風が近づいているせいでしょう。こりゃあ、かなり降りますよ。

伊丹 「一雨降ったら涼しくなるかねえ。

能登 「よけいに蒸すんじゃないの。

大造 「蒸しますよ。

伊丹 「そうかい。

大造 「蒸します。あの時もはじめは蒸したんです。

伊丹 「へっ、

大造 「二年前の山崩れるとき。あの時も台風が接近していて、こんなふうには蒸しました。ほんとにイライラする暑さでした。頭がヘンになるくらい暑かったです。それからです、大雨になったのは。

伊丹 「ここさ、この宿さ、裏手は山の斜面だけど、大丈夫だよな。だって、二年前もここは大丈夫だったんだろ。

能登 「その時に死んだ島民の恨みがドーン。

伊丹 「ちよっと、能登ちゃん、気味の悪い話はナシにしようよ。

能登 「そんなワケはないか。

大造 「あの時、死者は103人。島民やら釣り客やら、島にいた者のおよそ五分の一が土砂に押し流されて死んでいます。

能登 「じゃあ、あるかも、か。

伊丹 「能登ちゃん、

能登 「冗談だよ。

雨が強くなってきた。

伊丹 「えらく降ってきちゃったよ。

大造 「降ってきましたね。

能登 「かなりだな。こりゃ大雨だなあ。豪雨だ。

伊丹、さかんに内線電話を試みる。カチャカチャカチャカ。

能登 「何してんの。

伊丹「ナンでもいいからさ、喉が渴いてたまんないよ。なんか冷えてるのをね。けど、つながないんだよなあ。

大造「それ、つながりませんよ。

伊丹「えっ、

能登「どうして。

大造「つながらないでしょ。

能登「だから、何で。

大造「切ったんです。

能登「切ったってっ、

大造「切断したんです。

能登「えっ、何。

大造「線。

能登「線っ、

伊丹「線、切ったの。

大造「はい。

能登「まさか、あんた、が、かい。

大造「はい、私が。

伊丹「えっ、えっ、

大造「内線切ったんです。

能登「ナンで。

大造「切らなくてもよかったんです。どうせ誰も出ないんだから。一階に降りていけばワカリマス。このひと、誰もいません。

雨がさらに激しくなってくる。

大造「ひどい降りです。これは。避難勧告出るか、どうだっ。

伊丹「あのさ、自転車屋さん。

大造「はい。

伊丹「ナンの話だろ。

大造「何がです。



伊丹「内線切ったり、ここの宿のひとが誰もいないとか。まさか、自分たちだけでもう何処かに避難したなんて、てなことはナイわな。

能登「そりやナイでしょ。

伊丹「でも、誰もいないんだろ。留守なんだろ。

大造「内線チョッキンなんかしなくてよかったんだ。

伊丹・能登「だからさ、

大造「偶然ってのは恐ろしいもんですね。

伊丹「偶然っ。

大造「ええ、偶然です。

能登「またあ、何の話だよ、今度は。

大造「たぶん、あのマンションとレストランの売買の事だと思うんですが、悪徳成り金の大屋が島にいたんです。二年前の大雨のあの日。

伊丹「へーえ、そうなの。

大造「私、好きだったんです。

伊丹「えっ、

大造「好きだったんです。

能登「ナンダか、話が全然みえないな。

大造「四国うどん。かやく定食。

伊丹「えっ、

能登「ああそうか、あんた、あのリングゴ類っぺの娘が、

大造「いえ、そんなんじゃないです。四国うどんが好きだったんです。〈かやく定食〉が。もちろん、四国うどん入れた餛飩箱（けんどんばこ・岡持のこと）下げて、ちよっとお店お願いしますって、赤い頬っぺで笑顔いっぱいに出前していた、あの娘（むすめ）もいー娘（こ）だなど。だっていまどき、そんな人間イマスつつツツ。店の客の誰も、食い逃げなんかするひとじゃナイ。あたりまえのように、そんなふうには、店でうどん食ってる連中に声かけて、ちっちゃいんですよ背が。餛飩箱、重いです。ですから、カラダがちよっと斜めになるんです。白いエプロンして、白い割烹頭巾して、後ろ姿が、一所懸命なんです。時々、自転車使っんです。そうしたら、よろけちゃって、こけそうになって、観てるほうがハラハラなんですよ。

伊丹「それ、絵になる。イイ写真になるよ、ねえ、能登ちゃん。

能登「そうねえ。でも、やっぱり好きだったんでしょ。ねっ、

大造「だから、それは。ともかく、あの成り金野郎ときたら、この島に卑弥呼の銅像建てようとか、この島に卑弥呼の子孫がいるってのはどうだとか、でっち上げまで画策してんです。大嘘の観光開発を悪い仲間と一緒にやって企んでやがったんです。これも偶然、耳にしてしまったんです。

能登「あのさあ、ひよっとしてあれなんじゃナイの、自転車屋さん、リングコ頬っぺと資料館でデートなんかしたんじゃナイのかい。

大造「一緒に資料館いったら、何でデートなんですっ。

伊丹「あっそう。一緒に行ったことはあるんだ。ナンダか、そうね、よくワカラナイけど。(唾を飲み込む程度の少々の間があつて)あのさ、自転車屋さん、何か、どうかしたの。

大造「何がです。

伊丹「いや、ナンカあ、怒ってるというか、その、憤っているみたいに聞こえるから、さつきから、ほら、そのさ、

大造「もうすぐ直りますよ、エアコン。

伊丹「あっ、そおっつ、そりやあいイ。なっ、なっ。

能登「えっ、ああ、グッドだ。

大造「直せますよ、これくらいは。だって二年前もやったんです、私が。

伊丹「えっ、二年前にも修理したんだ。なんだそうだったんだ。良かったナア、あなたで。あなたに修理頼んで正解だ。ねっ。

能登「二年前ねえ。

大造「ここに泊まってたんですよ、悪徳金融、この部屋に。ケチな野郎です。こんな島にだって、もちっとマシな旅館あるのに。

能登「満室だったとか。

大造「旅館がですか。

伊丹「いや、それはもう。(能登に)二年前、ナンかあったのかな。

能登「あのさ、つまり、あなたとその金融業者とが、二年前もこの部屋にいた。そういうことなんだよな、たとえば二人きりで。あの大雨の日だよ。あんた偶然、今日みたいに、クーラーの修理を頼まれた。

大造「エアコン。

能登「そ、そう、エアコンの修理を頼まれた。そうなんじゃナイの、ひよっとして。

大造 「大筋はそうなります。

伊丹 「そういうシチュエーションなのね。

能登 「偶然ねえ。よし。ちよつと話そう、自転車屋さん。

伊丹 「えっ、ナニすんの、能登ちゃん。

能登 「いや、ワカルんだ。これでもシナリオライターだからな。なつ、ちよつと話そう、自転車屋さん。あんた自転車屋さんだろ。

伊丹 「ナニ訊いてんの。

能登 「まず、Identityをハッキリさせてんだよ。

伊丹 「あっそ。ワカンナイから、もう、任せる。

能登 「そうでしょ、あんた。

大造 「私、私は、(芝居ツ気たつぷりに脚立を降りて来る) 私は、あるときは、取説をみるエアコンの修理人。あるときは、歴史好きの流入の民。またあるときは畑の肥料製造人。またあるときは、邪馬台国解説者。またあるときは四国うどんの常連。しかしてその実体は、誠意と現実のひと、ただの自転車屋、藤村大造。(と、道具箱の中から出刃包丁を二丁取り出して、両手に持つ)

伊丹・能登 「うっ、わっ、

鶏乃は、一応は立ち上がるが、我関せずと、次間に行ってしまう。

伊丹 「おい、そんなもの、

大造 「どうしました。

伊丹 「そんなもの、どうすんだ。

大造 「修理道具ですよ。

伊丹 「無理、その解釈は無茶。

大造 「魚を三枚におろしたりもしますから。私、そういうことも釣り客から頼まれるんです。

伊丹 「それは、コジツケというか、強引というか、(能登に) こういうの、我田引水っていいのかな。おい、鶏乃くん、きみ、柔道なんだろ。

鶏乃、黙って海だか、雨だかをみている。

能登「千恵蔵さんっ、いや大造さんっ、こうじゃナイのか。あんた、その頬っぺのリンゴの娘が金融業者の玉の輿に乗ったんで墮落したと、そう考えてだろ。」

伊丹「能登ちゃん、

能登「頬っぺのリンゴの娘が割烹着から、チャイナドレスになったのは、金融業者の亭主とその連れ子の不良のせいだと思ってんだろ。」

伊丹「能登ちゃん、ここはよくワカンナイけど穩便に、

能登「いや、俺にはだいたい見当つくんだ。こういうプロット、むかし、書いたことあるから。」

伊丹「そんなのアテになんないよ。」

能登「あのね、大造さん。」

大造「何です。」

能登「俺はね、惨（むご）いこというけどさ、女つてのはそういうもんじゃナイかと、そういうことは人生で学んできたんだ。」

伊丹「能登ちゃん、ナニ、いつてんの。」

大造「何、いつてんだ。」

能登「つまり、リンゴの頬っぺが、白い割烹着から太股スリットのチャイナドレスになったのは、元々、彼女がそんな傾向をもった女性だったんじゃナイかと、思うんだ。女つてのは、たいていミカケはアテになんない。女のミカケは男の妄想。悲しいかな、男の妄想は、女をみんなマリアかマドンナか『風たちぬ』の節子にしてしまうんだ。卑俗に言えば、小林旭さんの歌に出てくるような女なんて存在しません。若いひとにもワカリヤスクいうと、あだち充のマンガに出てくるヒロイン、そんな女はこの世にはいない。みんな男の妄想だ。ただの *Image*、想像だ。創り話だ。空想だ。熱望だ。願望だ。夢想だ。美化だ。ウソッ、ウソッなんだよ。」

伊丹「能登ちゃん。」

大造「しっかりしろ。」

能登「しっかりしなきゃイケナイのは、あんただよ。たしかに、頬っぺのリンゴ娘は変貌したのかも知れない。変貌したんだろう。けれど、女つてのは変貌するんだ。『女は二度生まれる』って川島雄三監督もいつてる。」

大造「たしかにあの映画の若尾文子は良かった。」

伊丹「異議なし。

能登「女は男次第だと世間の相場はそうなってるけど、可哀相にそのリングちゃんも男運が良くなかったのかも知れない。それはしかし、それはね、大造さん、俺たちにはほんとうのところは、ほんとうにワカラナイんだよ。男だってあげまんも掴めば、さげまんも掴むからな。男も女も、騙されるし、騙すしな。どんな男が良くて、どんなのが悪いかは、相性次第なんだ。ソクラテスの妻は悪妻だったということに歴史では、そうなっている。哲学者になりたいのなら、悪妻を持つとソクラテスがいったということになっている。しかし、良妻賢母の哲学者の嫁だっているんだ。

伊丹「能登ちゃん、説得力が広がり過ぎて遠退いている感じするよ。

能登「だから、リング嬢も、四国うどんやってた当初から、自分はシンデレラのように、いまに、こんなうどん屋なんかやめて、お姫様のような生活をするんだ、と、夢みていたかも知れないじゃナイか。そのシンデレラさへ、最近の研究では、ガラスの靴をお城に忘れてきたのはワザとだろうって見解も出てるんだ。

伊丹「ソクラテスの次はシンデレラかい。

能登「それに、俺は、その娘がどうして四国に嫁いだから早くに出戻りしたのか、そこるところに、何か重要な turning point があつたんじゃないかと、物書きの端くれとして、そんな気がしてるんだ。つまりね、その娘は四国ではシンデレラにはなれなかったんだ。大造「つまり、シンデレラは悪女だったといたいのか。

伊丹「そんなこといつてたの、能登ちゃん。

能登「いつてナイでしょ。

伊丹「そういうふう聞くほうがどうかしてるよな。

能登「シャルル・ペローのあのファンタジーには謎があるんだ。カボチャの馬車もドレスも、12時を過ぎて元にもどったのに、ガラスの靴だけはそうならなかった。それは何故なのか。そう思わないか。

伊丹「たしかに、そうだな。

能登「それは、あの靴だけが魔法で創られたものじゃなくて、シンデレラが用意した、ホンモノだったということなんだ。いいか、学を出すぞ、教養みせるぞ。ペローのつけた原題は『サンドリヨン』だ。これは「灰かぶり」って意味だ。女性というのは、みながみなとはいわないが、たいていはシンデレラ願望ってのを持ってるものなんだ。いまは灰をかぶったような生活をしているが、いつかはお姫さまになれる日が来る。そう思ってるから、

結婚に憧れるんだ。

大造 「それが何故イケナイ。女のこはシンデレラに憧れて挫折する。男はハムレットになるうとして、けつきよく、ドンキホーテになってしまう。けれど誰だって、夢くらい、みてもイイじゃないか。

伊丹 「シンデレラはもういいよ、いったい、この自転車屋さんがナニしたっていうのよ、能登ちゃん。

能登 「決まってるでしょ。刺したんだよ、金融業者を殺したんだよ、あの出刃包丁で。

伊丹 「ええっ、そ、そんなあ。

能登 「気づけよ、それくらい。

伊丹 「いやあ、まさかそんな。

能登 「(大造に) そうなんだから。俺のシナリオのプロットではそうなってんだから。

伊丹 「だから、どうなってんの、このひと。

能登 「ワカラン。ワカランけど、おツムの中が逆回転して、というか、クロスカッティングやら、カットバックやら、フラッシュバックだよ伊丹さん。伊藤大輔の『眠狂四郎無頼剣』、オーソン・ウェルズの『市民ケーン』、黒澤明の『生きる』の死んだ主人公のお通夜の場面。あれよ、あれ。台風接近の雨、この民宿の部屋、エアコンの修理、二年前と同じような状況の今日、自転車屋さんは、大造さんは、ナンダかその時のことを急に思い出したんだ。それで、

伊丹 「それで、

能登 「それで、どうにか、なってらっしゃるんだ。

伊丹 「どうにかって、そんな。

大造 「どうにもなってませんよ。内線を切る必要はなかったけど。とりあえず、状況を同じにしなきゃと、思ったんだなあ。いや、大丈夫。

能登 「大丈夫。よし、それならいってくれ。俺たちをどうしようという気だ。

伊丹 「そ、そうだよ。伊丹さん、

大造 「伊丹さんは、あんたです。

伊丹 「あっ、そうか。伊丹は俺だ。

能登 「伊丹さん、落ち着いて。

伊丹 「能登ちゃんが脅してんだよっ。俺たち、何かしたかつ。んっ、何かしたつ。

大造、出刃包丁を凝視している、が、

大造「あの夜、私は出刃をこんなふうに握って、悪徳金融ハゲの前に立ってました。外はヒドイ雨でした。

伊丹「悪徳金融に、さらにハゲが加わったよ。

能登「ハゲだったんだな。

大造「飲めない酒飲んで。温っためたら飲めるかと、ビールを温ったためて飲んだら、飲めたんで、そいつを引っ掛けて、ここにエアコンの修理に来たんです。でも工具箱には、コイツしか入れて来ませんでした。(構える)二丁出刃。またの名を秘剣揚羽蝶。「姓は源氏、名は九郎、おぼえておいてくれとはたのまぬ」、カハッ。

能登「『源氏九郎颯爽記』だ。片岡知恵蔵の次は錦之助のつもりだな。

伊丹「刺したのっ、ねえっ、刺したのかいいッ。大屋をおつつっ、

大造「そのつもりでした。けれども、突然地鳴りが聞こえたんです。あっ、山の音だ。山の水の音だ。咄嗟に窓を開けました。こっちのほうの斜面も少し崩れて水が流れてました。もう一度、ドドーンという音が山の向こうで聞こえました。あっちだ。山の反対側の斜面が崩れている。土砂だ。土石流だ。墓地をつくるのに、無理な造成したからだ。私は、出刃包丁を二丁とも悪徳金融ハゲ出っ歯に投げつけると、懐中電灯一つ持って、大急ぎでここを飛び出して、山の反対側に出ようとしたんです。

伊丹「能登ちゃん、出っ歯まで追加されたよ。

大造「出刃は二丁もあつたのに、相手の出っ歯を一本折っただけだったようです。

伊丹「出刃に出っ歯。それは、ちよっと苦しい。

大造「けれども、裏側に廻る路はもう、崖崩れで遮断されていて、通れなかったんです。じゃあ、山に入るしかナイ。獣路(けものみち)を通って、私、そうしました。風も雨も激しくて、なかなか歩けませんでした。けれども、途中で誰かとすれ違ったから、まだ行けるはずだと、そう考えて、ようやく裏の斜面がみえるところまで出たんです。土砂崩れで、山の斜面は抉られてました。墓地とともに十字架は流されて、麓の民家も壊滅しているようでした。

能登「元リングゴ類っぺの、四国うどん割烹着の家もだな。

大造「駄目のようでした。

能登「大造さん、よく聞くんだ。それはね、二年前のことなんだよ。

大造 「ええ、二年前です。

伊丹 「能登ちゃん。

能登 「ナニ。

伊丹 「ちよつと俺、疑問符。

能登 「ナンだよ。

伊丹 「この自転車屋さんだけど、

能登 「ナニよ。

伊丹 「リンゴ頬っぺはこっそり隠れるようにして島に帰って来ていたっておっしゃったじやナイ。

能登 「そいで、

伊丹 「その、こっそりのことをだよ、どうしてこの自転車の大造さんがご存知だったんだろ。

能登 「そうだよな、そこだよな。俺もちよつと気になってたんだ。

伊丹 「こっそり隠れてなんだよ。

能登 「しかし、こんな小さな島だからな。

伊丹 「とはいえ何か、あるんじゃないの。

能登 「ある。きっとある。

大造 「そんなことはどうでもイイ。

能登 「どうでもイイといわれると、どうでもイイということにしないのが、俺たちの仕事のようなもんでね。

大造 「いろいろ、米や油や味噌の配達もやってんだ。こっそりだって、生活はするだろう。能登 「そういうふうにいわれると、終わってしまうな。

伊丹 「いいのかな、終わって。

大造 「おいつ、

伊丹・能登 「はいっ。

大造 「この出刃包丁、先っちょが尖ってるだろ。

伊丹 「尖ってる。

大造 「(両頬をその先端でチクチク) チクチクすると痛いんだ。

伊丹 「よしなさい。

大造 「しかし、これで腹をズブリとやられると痛いだけではすまない。



能登「アタリマエだ。

大造「投げつけないで、ズブリとやれば良かった。出っ歯なんか折れてもしょうがないだから。けれども、私は、ひみ子のことのほうが心配になったもんだから。

伊丹「ヒミコって、また邪馬台国の話に戻るのかい。

能登「チガウよ、四国うどんの娘は、たぶん、ひみ子さんというんだよ。そうなんですよ、大造さん。

大造「えっ、いや、知らないです、そんなことは。

伊丹「ひよっとして、身寄りがナイってのは、

能登「ナンかワケアリの娘なんじゃないのかな。

大造「だから、そういうことは、知らないといってるだろ。

と、ここで、階下から声がしたらしい。

大造「はいっ。えっ、何ですか。(廊下に飛び出して、おそらく階段を降り始めた)

伊丹「ナンダヨ、こここのひと、いるじゃナイ。

能登「みたいだな。

大造「(声だけ) 避難勧告、避難勧告出ましたか。

ダダッと階段を上がって来る音。

大造「(伊丹と能登に) このひとじゃありません。地元消防団の方です。避難勧告が出たらしいです。すぐに避難指示に変わりますから、キケンですから、ここは離れたほうがイイです。

伊丹「その包丁もキケンだから、離れたほうがイイと思うんだけど。

大造「ああ、これ。ともかく、避難です。急いで下さい。

伊丹、能登、荷物を抱える。

大造「私の軽トラが玄関に停めてありますから、それに乗って下さい。

伊丹、能登、いわれるままに廊下に出て、階段を降りていく。

雨、激しい。

大造、出刃包丁を片づける。

鶏乃は、脱力したように立って大造をみつめている。

大造「鶏乃さん、

鶏乃「二年前もこんな雨でした。

大造「憶えてますよ、泥にまみれた顔、怯えた目。あの映画を観て驚きました。二年前、裏山の獣路（けものみち）ですれ違ったときの懐中電灯の明かりの中でみた、あなただ。

鶏乃「一所懸命助けようとはしました。二人して逃げました。いえ、二年前の豪雨の日のほうです。雨の中を途中まで手を引いて、ぬかるむ道を一緒に逃げました。何度も転びながら。何とか山の斜面辺りまでは。そこへ、

大造「流れてきたんですね、土砂が。

鶏乃「手が、手が離れて、真っ暗闇で、何もみえなくて。

大造「余計なことかも知れませんが、遺体が抱いていた非常持ち出しに、漢方薬、入ってました。知りませんでした。彼女、何処か患っていたんですね。

鶏乃「私とひみ子が、この島から逃亡してから、

大造「いや、いいんです、もう。いいんです。

鶏乃「二人して、約束したんです。どちらが先に死んでも、この島の十字架の下に眠ろうって。そうして年に一度は遇おうって。

大造「そうでしたか。さあ、早く逃げないと、ここも危ない。

鶏乃「自転車屋さん、あなたいったい、ひみ子の何なんだ。

大造「あの娘（こ）には、よく自転車の修理を頼まれました。新しいのを買いなよって何度もいったんだけど、もったいないからって。私、（一息あって）私は、ただの自転車屋です。

と、直したばかりのエアコンから、煙が、プシューッと吹き出す。

大造「えっ、

と、目測点検。つまり下から、横からジロジロとエアコンを覗る。

と、また、プシューツ。

大造「あららあつ。ねつ、だから、エアコンなんて手に負えないんです。

下から、伊丹と能登の声。

伊丹「自転車屋さんつ、

能登「大造さんつ、鶏乃つ、

伊丹「早くしないと。

能登「大造さんつ、

伊丹「鶏乃くんつ、

大造も鶏乃も、その声には反応せず、エアコンをみつめている。

と、ドドオツと、土砂崩れの音が背後に聞こえて、次第に大きくなっていく。

大造も、鶏乃もエアコンをみつめているだけだ。

終幕

2014 / 09 / 10 (初稿)

2015 / 11 / 02